抽象のしくみ　観賞・批評・教育に向けてのアプローチ

2022 年度活動報告

本プロジェクトでは、いわゆる抽象表現に限らず、「表現」と呼びうるあらゆる創造行為の根底で働いている人間の精神作用としての「抽象化」、「抽象作用」に着目し、この根源的な活動を手掛かりに、表現にまつわるさまざまな事象を考察することによって、新たな鑑賞、批評、そして教育に繋げていくことを目指している。

当研究は本年度より芸術資源研究センターの重点研究プロジェクトとして参加することになったが、それ以前の 2020 年度後期から本学のテーマ演習の枠組みを使用し既に開始されている。

これまで授業という性質上、セメスターごとに「デフォルメ」（20 年度後期）、「文字」（21 年度前期）、「オノマトペ」（21 年度後期）という検討課題を設定し、各課題に係る「抽象のしくみ」について参加者と議論を重ねながら検証のための切り口を導き出し、その切り口を検討するための実技課題を考案・実施することで、包含される抽象作用を経験的に理解することに努めてきた。

今年度は検討課題を通期で「装飾」と設定し、装飾造形に内包される抽象作用について検討した。

前期には「装飾」を俯瞰的に捉えることから始め、【モチーフから装飾へ、およびその意味】、【既存の模様・パターン】、【機能性（装飾か否か）】という 3 つの切り口を設定した。その後、参加者各自が興味のある切り口に分かれて班を作り、班ごとに並行して話し合いを重ね、それぞれの切り口から装飾に係る抽象作用を浮き彫りにするための実技課題を考案し、参加者全員でそれを実施、そこで作り出された成果物を元にさらに検討を行った。結果的には、平面表現における装飾の問題を中心に扱うことになった。

後期には前期の結果を受け、今度は立体表現における装飾の問題と、さらには装飾概念が成立する以前の「装飾」についての検討を行った。手始めに国立民族学博物館に見学に行き、さまざまな装飾の実見を通して【形から考える（装飾概念ができる以前の「装飾」に用いられる形に焦点を当て検討する）】、【物語から考える（装飾概念ができる以前の「装飾」が持つ意味性・物語性に焦点を当て検討する）】というふたつの切り口から考察することになった。その後、瓜生山学園京都芸術大学芸術館の収蔵する縄文土器を熟覧する機会を得、また同館より教材用として登録されている縄文土器の実物を 2 点借り受けることができ、実際の模刻を通して、装飾が「装飾」と呼ばれる以前の造形を体験的に考察する機会を作ることができた（前後期授業の詳細は今年度本学美術学部研究紀要に掲載）。

ここまでの研究は、あくまで授業内の限られた時間で行われてきたものであるが、本学のさまざまな専攻に所属する学生と異なる専門領域の研究者が共同で検討課題に向き合うことにより、広範な視点を生み出し、抽象に係る本質的な問題を浮き彫りにしながら、それを抽出可能にする独自の実技課題を作り出し、その成果物を蓄積することができている。しかし残念ながら、時間の都合上、これらの蓄積された成果を振り返り、さらにブラッシュアップしてまとめることがこれまで十分にできているとはいえない。

今回この重点プロジェクトに参加することをきっかけとして、今年度の終わりまでには、現時点までに蓄積された成果を振り返り、整理する手法を確立し、これまでの期間で築き上げてきた研究サイクルの中に組み込むことを目指したいと考えている。

小島徳朗

平面表現における「装飾」の検討

立体表現における「装飾」の検討